

草創期の中国仏教通史と宗学教育

—吉水智海と望月信亨を例に—

The Complete History of Chinese Buddhism in the Initial Phase and the Education of Buddhist Denominational Studies : In the Case of Yoshimizu Chikai and Mochizuki Shinko

佐藤 裕亮

Yusuke SATO

Key words: 僧侶養成教育 中国仏教史 望月信亨 吉水智海

Buddhist training Buddhist history of China Mochizuki Shinko Yoshimizu Chikai

はじめに

2009（平成21）年、仏教史学会は第60回大会の節目に「戦後仏教史学の回顧—あらたな研究の地平をめざして—」と題するシンポジウムを、龍谷大学において開催し、下田正弘（東京大学）、氣賀澤保規（明治大学）、林淳（愛知学院大学）が登壇（所属はいずれも当時のもの）、それぞれ「日本の仏教学の120年を回顧して」、「中国南北朝隋唐期をめぐる仏教社会史研究の地平」、「学問史から見た仏教史学会」というテーマで基調報告を行った。このうち、戦後中国仏教史研究の成果に直接的に言及しているのは氣賀澤保規の報告で、南北朝隋唐期を対象を絞りつつ、中国仏教史の当面する状況や南北朝隋唐史に占める仏教の意義を強調し、「南北朝隋唐仏教史（仏教社会史）の研究者とその主要成果一覧」「一般概説書（中国史）に見える仏教史記事一覧」「中国仏教史の通史概説書関係一覧」などの資料を示して、日本における中国仏教史研究の蓄積と水準の高さや、仏教史と一般史の垣根を低くすることの必要性、研究の現状と課題などについて述べている。前述のシンポジウムの記録は『仏教史学研究』53巻1号に掲載されているが、それ以前にも同学会は1956（昭和31）年1月刊行の『仏教史学』5巻3・4号に「戦後仏教史学の回顧と展望」という特集を組んで、斯学の歩みを回顧している。この特集は「第1部 イン

ド・東南アジア・チベット」「第2部 中国附西域・朝鮮」「第3部 日本」の3部からなり、このうち第2部は以下のように構成され、当時、龍谷大学助教授であった小川貫弉が「漢魏晋南北朝仏教史の課題」と「西域仏教文化」を、京都大学人文科学研究所の助手を務めていた牧田諦亮が五代～現代までの中国を対象とする「近世仏教史」と「朝鮮仏教」を、大谷大学特別研究生であった滋野井恬が「隋・唐」を担当しており、当時の若手・中堅の研究者の視点から戦前～昭和30年代初頭までの研究を俯瞰するものとなっている。

鎌田茂雄が、平川彰編『仏教研究入門』（大蔵出版、1984年）に寄せた「中国仏教研究の問題点」の中で指摘しているように、本格的な中国仏教史研究の始まりは、仏教史学会の前身のひとつである1937（昭和12）年の「支那仏教史学会」設立とその機関誌『支那仏教史学』の創刊に求められることが多い。中国における仏教の歴史的展開を、文化史や社会経済史との関連において把握しようという動きが、学会の設立と機関誌の創刊という、目に見える形であらわれた、最初の出来事であったことは確かであろう。しかし、中国仏教の歴史的変遷を俯瞰していこうという行き方は、『支那仏教史学』の創刊以前から、さまざまな人びとの手によって試みられてきたことにも目を向ける必要もあるのではないだろうか。

『支那仏教史学』の創刊に前後して、各種雑誌に発表

された中国仏教史に関する夥しい論考は、龍谷大学図書館編『仏教学関係雑誌論文分類目録』（龍谷大学出版部、1931年）や、中国思想宗教史研究会編『中国思想・宗教・文化関係論文目録』（国書刊行会、1976年）などの主題書誌を用いれば、比較的容易に俯瞰することができるし、主要な雑誌ごとの内容については、国書刊行会編『仏教学関係雑誌文献総覧』（国書刊行会、1983年）などで、ある程度まで把握が可能である。また、昭和の初めごろまでの、中国仏教に関する通史的な著述に関しては、道端良秀「『支那仏教史』既刊書概観」（『支那仏教史学』1(1)、1937年4月）に主要なものが取り上げられている。

近代日本における中国仏教史研究の来し方を振り返り、その到達点と課題を浮き彫りにするためには、以上、紹介してきたような手がかりをもとに、さまざまな視点を設定しながら考察を重ねていく必要があるが、本稿ではひとまず、明治～昭和戦前期の中国仏教通史に関する書誌の作成を通じて全貌を把握した上で、明治30年代を代表する中国仏教史の一つである吉水智海『支那仏教史』を取り上げて、その編刊の背景を確認していきたい。

1 草創期の中国仏教史

(1) 明治～昭和戦前期の中国仏教通史に関する書誌

本節ではまず、①道端良秀『支那仏教史』既刊書概観』と、②深浦正文『新稿 仏教研究法』（誠信書房、1963年。大正12（1923）年に刊行された丙午出版社版『仏教研究法』の改訂）を手掛かりに、明治～昭和の初めまでに刊行された中国仏教史を掲げた上で（各書誌情報の末にある①、②は『支那仏教史』既刊書概観』および『新稿 仏教研究法』に言及があることを指す）、『支那仏教史学』創刊以前にどのような中国仏教史が物されてきたのかを、確認していく。

- ・島地黙雷・織田得能『三国仏教略史』鴻盟社、明治23（1890）年 ②
- ・土岐善静『三国仏教伝通略史』経世書院、明治26（1893）年
- ・藤井宣正「支那仏教史」『愛蔵全集』森江書店、明治39（1906）年 ①②
- ・吉水智海『支那仏教史』金尾文淵堂、明治39（1906）年 ①②
- ・境野黄洋『印度支那仏教史要』鴻盟社、明治39（1906）年 ①②
- ・境野黄洋『支那仏教史綱』森江書店、明治40（1907）年 ①②
- ・伊藤義賢『印度支那仏教通史』頭道書院、明治43（1910）年 ①

- ・境野黄洋『印度支那仏教小史』鴻盟社、大正4（1915）年 ①②
- ・境野黄洋『支那の仏教』仏教大観；第3編、丙午出版社、大正7（1918）年 ①②
- ・佐々木憲徳『上世支那仏教学史』興教書院、大正9（1920）年 ②①
- ・橘恵勝『支那仏教思想史』大同館、大正10（1921）年 ①②
- ・伊藤義賢『支那仏教正史』上、竹下学寮出版部、大正12（1923）年 ①②
- ・平安専修学院編『印度支那仏教史要』興教書院、大正15（1926）年
- ・佐藤泰舜「支那仏教史講話」『仏教講座』1～4、仏教芸術社、大正15（1926）年
- ・境野黄洋『支那仏教史講話』上・下、共立社、昭和2（1927）年～昭和4（1929）年 ②
- ・龍谷大学編「支那仏教史」『仏教要義』上、龍谷大学出版部、昭和3（1928）年 ①②
- ・西本願寺学務部『印度支那仏教史』昭和3（1928）年 ①
- ・境野黄洋「支那仏教思潮」『岩波講座世界思潮』第2輯 主潮、岩波書店、昭和4（1929）年
- ・常盤大定「支那仏教思想史」『大思想エンサイクロペディア』6、春秋社、昭和4（1929）年
- ・境野黄洋「支那仏教の話」『曹洞宗布教叢書』9～10、曹洞宗布教叢書刊行会、昭和5（1930）年
- ・水野梅暁「支那仏教の沿革」『東亜研究講座』第34輯、東亜研究会、昭和5（1930）年〔1931年刊・合本版もあり〕
- ・常盤大定「支那仏教史」『東洋史講座』12、雄山閣、昭和6（1931）年 ①
- ・常盤大定『支那仏教史』上・下、仏教大学講座、仏教年鑑社、昭和8（1933）年 ①
- ・常盤大定『支那の仏教』青年仏教叢書2、三省堂、昭和10（1935）年 ①
- ・境野黄洋『支那仏教精史』境野黄洋博士遺稿刊行会、昭和10（1935）年 ①②
- ・森田芳夫『概観仏教史』緑旗聯盟、昭和10（1935）年〔第2章 支那仏教〕
- ・宇井伯壽『支那仏教史』岩波書店、昭和11（1936）年（岩波全書；第80） ①②
- ・道端良秀『概説支那仏教史』法蔵館、昭和14（1939）年 ②
- ・野依秀市『支那仏教講話』仏教思想普及協会、昭和14（1939）年
- ・常盤大定「支那仏教概説及び道仏二教の交渉」教学局編纂『教学叢書』特輯 第2篇、内閣印刷局、昭和14（1939）年

- ・塚本善隆「支那仏教」『世界精神史講座』2 支那精神、理想社出版部、昭和 15 (1940) 年
- ・塚本善隆「支那仏教史」『支那地理歴史大系』11 支那宗教史、白揚社、昭和 17 (1942) 年
- ・金山正好『東亜仏教史』理想社、昭和 17 (1942) 年
- ・久保田量遠『支那儒道仏交渉史』大東出版社、昭和 18 (1943) 年
- ・常盤大定「中国仏教史概説」『支那仏教の研究』第 3、春秋社松柏館、昭和 18 (1943) 年
- ・塚本善隆「支那仏教史」『宗教体系』5 宗教史篇、大東出版社、昭和 24 (1949) 年

ここに掲げた書誌には、いわゆる「中国仏教史」だけでなく、『三国仏教略史』や『印度支那仏教史要』あるいは『東亜仏教史』のような、中国以外の地域に関する仏教史的叙述を内包するものや、『上世支那仏教学史』『支那儒道仏交渉史』などのように、時代や主題を限定した通史的著述も含まれている。一方で、武内義雄『支那思想史』や、平凡社から刊行されていた『世界歴史大系』のように、中国哲学史や中国史に関するものうち仏教史に一定の紙幅を割いているものは除いているが、明治の中頃から昭和 20 年代にかけて、どのような中国仏教史が、どのような著者や出版者によって世に送り出されてきたのかを把握するための糸口にはなるはずである¹⁾。

(2) 草創期の中国仏教史とその著者たち

明治時代の日本において「仏教史」を冠した書物が世に流布するようになるのは、明治 20 年代のことである。この時期を代表する仏教史としてまず挙げられるのが、インド・中国・日本の 3 地域における仏教について概説した、島地黙雷・織田得能『三国仏教略史』であろう。

単独の中国仏教史が書かれ、書物の形で流布するようになるのは明治 30 年代に入ってからのもので、藤井宣正や吉水智海、境野黄洋の著述が知られるが、就中、吉水の『支那仏教史』は、

- 第 1 期 伝訳時代
- 第 2 期 講究時代
- 第 3 期 立教時代
- 第 4 期 存立時代
- 第 5 期 漸衰時代

という時代区分のもとに、全 43 章にわたって中国仏教の歴史について概説した本格的な通史として知られる²⁾。

藤井宣正は明治 36 (1903) 年、吉水智海は明治 37 (1904) 年、島地黙雷と織田得能は明治 44 (1911) 年にそれぞれ亡くなるが、境野黄洋はその後も執筆を続け、

- ・『支那仏教史綱』森江書店、明治 40 (1907) 年
- ・『印度支那仏教小史』鴻盟社、大正 4 (1915) 年

- ・『支那の仏教』丙午出版社、大正 7 (1918) 年
- ・『支那仏教史講話』上・下、共立社、昭和 2 (1927) 年～昭和 4 (1929) 年
- ・『支那仏教精史』境野黄洋博士遺稿刊行会、昭和 10 (1935) 年

などの通史的な著作を物している。とりわけ、晩年に著された『支那仏教史講話』上・下 2 冊と遺稿集『支那仏教精史』には、前者は唐代まで、後者は南北朝時代までの仏教史が、訳経史や教理・教学史を核として詳述されている。『支那仏教史学』の同人の一人であった塚本善隆が、後者の書評の中で「実に明治大正年間に新たに開拓され頓に発達した、日本の支那仏教史学の総和として聳ゆる最大の金字塔である」と述べているように³⁾、この二つの著作は、境野による中国仏教史研究の集大成として、あるいは、明治・大正期における中国仏教史研究の一つの到達点を示す著作として、長く参照され続けてきたものである⁴⁾。

明治・大正期にかけて中国仏教通史を手がけた、もう一方の人物として、浄土真宗本願寺派の学僧、伊藤義賢の存在を忘れてはならない。伊藤は仏教大学本科（現在の龍谷大学）に学び、平安中学や北陸中学、京都女子高等専門学校などの教員を歴任する一方で、山口県の明恩寺内に竹下学寮を設置し、寺院師弟の教育や出版活動に携わった人物で、その著述は先の書誌に掲げた、

- ・『印度支那仏教通史』顕道書院、明治 43 (1910) 年
- ・『支那仏教正史』上、竹下学寮出版部、大正 12 (1923) 年

以外にも『日本仏教通史』（興教書院、1910 年）、『日本の僧侶』（法蔵館、1911 年）、『大乘非仏説論の批判』正・続（真宗学寮、1954～1969 年）などの著作もある⁵⁾。

以上紹介してきたような、草創期の中国仏教通史を分析し学問史の中へと位置づけていくためには、著者の業績や版元の活動、編述の動機など、その背景となる部分について目を凝らしていく必要がある。すでに境野黄洋とその著述については紹介がなされているので、本稿ではその一例として吉水智海『支那仏教史』の事例を取り上げてみたい。

2 吉水智海著『支那仏教史』と望月信亨

(1) 『支那仏教史』の序を読む

明治 39 (1906) 年に金尾文淵堂から刊行された吉水智海『支那仏教史』は、今日では顧みられる機会は少ないが、草創期の中国仏教通史の一つとして知られている。標題紙を捲ると、明治 39 (1906) 年 4 月の日付をも

つ前田慧雲の「序」があらわれる。すこぶる簡略なものだが「頃日望月信亨氏来りて、吉水智海氏の遺著支那仏教史上梓の挙を説き、一言を題せんをと思む。予、吉水氏を知らず、然れども此著は支那仏教史研究の先鞭を着けたるものにして世を益する多からんとを思ひ、仍て賛成の意を述べ以て序に代ゆと云ふ」(句読点は適宜補った)と述べている点に注目しておこう。

前田による「支那仏教史研究の先鞭を着けたるもの」という評価については、今日でも基本的に肯首できる。明治期の中国仏教通史というと、境野黄洋のものが取り上げられることが多いが、その著『支那仏教史綱』は明治40(1907)年の刊行であり、本書のほうはずいぶん早い。通史的な叙述としては、これ以前に明治23(1890)年の島地黙雷・織田得能『三国仏教略史』があり、明治39(1906)年には境野黄洋『印度支那仏教史要』や、藤井宣正の「支那仏教史」を収めた『愛蔵全集』も刊行されているが、「支那仏教史」を冠した単行書としては、吉水の著述が最も古いものである。

また、望月信亨から、宗外の前田慧雲に「序」を寄せるよう依頼している点にも留意しておきたい。2月に哲学館の学長に就任したばかりの前田に序を依頼したのは、もとより本書の価値を高らしめるためであったのかもしれないが、そのさらに後景には、上梓にいたるまでの望月信亨の尽力がうかがえるからである。

望月信亨は、大正・昭和期を代表する浄土学・仏教学者のひとりで、その事績の概略は『恩師望月信亨先生』に掲載された「自叙伝」や「略年譜」などにより把握できる。本稿ではこの書を頼りとしながら、望月と吉水の関係を中心に『支那仏教史』刊行の背景について探っていくこととする。

前田の「序」以上に重要なのが、その直後に掲げられた望月信亨による文である。これによると、吉水と望月は同じ越前の出身であったこと、吉水が明治32(1899)年に浄土宗高等学院を卒業した後は、京都の第五教校教授、山口の第七教校校長などを歴任し(「教校」とは、明治時代後期に浄土宗僧侶養成を担った中等教育機関のひとつ。東京・仙台・長野・名古屋・京都・大阪・山口・熊本の8校が設置された)中国仏教史を講じ、その傍ら望月らが主宰していた雑誌『宗粋雑誌』などに自身の研究成果を発表していたこと、明治36(1903)年ごろ病のため職を辞し静養したが、明治37(1904)年4月2日わずか33歳にして亡くなったこと、この書物のもととなった原稿は、吉水自らがそれまでの講義の草案をもとに削除や補足を行い、死去前年の臘月、つまり明治36

(1903)年の12月に脱稿したものであることなどが見えてくる。

(2) 吉水智海と望月信亨の関係

吉水は、浄土宗僧侶を養成する学校教育制度の下で学び、明治32(1899)年の浄土宗高等学院卒業後は、明治36(1903)年まで京都・山口の教校教員として教鞭を執っている。一方の望月は、明治28(1895)年まで浄土宗学本校(浄土宗高等学院の前身)に学んだ後、明治29(1896)年2月からは浄土宗内地留学生として天台学の専攻を命じられ、明治32(1899)年7月までの間、比叡山ならびに京都にて修学し、同年9月に浄土宗高等学院教授に任ぜられ東京へと移っており、両者の卒業後の接点は薄い。

むしろ、この時期の両者を結びつけていたのは雑誌であった。明治31(1898)年、京都で、望月が吉岡呵成らと始めた雑誌『宗粋』は、彼が東京に移ったあとの明治33(1900)年より『宗粋雑誌』へと改称され、望月が高等学院の職を辞職する明治38(1905)年8月まで刊行が続けられた。「近代日本の宗教雑誌アーカイヴ」(<https://www.modern-religious-archives.org/>)に掲載された『宗粋雑誌』の目次情報を確認すると、吉水は明治33(1900)年から明治35(1902)年にかけて同誌に「支那初代の仏教」「羅馬帝国基督教伝播の事情」「宗教改革談」「成実論に関する研究」「宗教原論」「報恩主義の道德」「支那仏教史評論」などの文章を寄せていることがわかる。

『支那仏教史』に掲げられた望月の文に「予近年以来東都に在り、君と相見ざる三四年にして而かも遂に永訣を告ぐ、今此の遺著を上梓するに方りて涙滂沱として自ら禁じ得ざるものあり」とあるように、望月の高等学院卒業後は、お互いに面語する機会をあまり得られないまま別れたが、雑誌の編集者と寄稿者という関係は、その後もしばらくの間続いたのである。

(3) 望月信亨と金尾文淵堂との関係

『支那仏教史』が編集・刊行された明治38(1905)年から同39(1906)年にかけて、望月は一つの転機を迎えつつあった。その様子は『恩師望月信亨先生』所収の「自叙伝」に、

明治38年4月、宗務当局は、予が雑誌『宗粋』を編集し、かつその誌上において宗政を難じ、宗務当局者に反対したる過度をもって、突如として予を依旨免職に処したので、ともかく高等学院を去らねばならぬこととなり、予の履歴の上に汚点を印することとなったのである。ここに予は宗門の時事を論ず

るようなことをやめ、宗教界という、広い、大きな舞台へ登場せんことを志して、雑誌『宗粹』を廃刊し、鷺尾順敬氏らと相い謀って日本宗教協会を創設し、その事務所を東京芝区西久保巴町の天徳寺中に置き、月刊『宗教界』の発行を企て、井上哲次郎、芳賀矢一、南条文雄、村上専精、宇野哲人、姉崎正治、白鳥庫吉らの朝野の名士数十氏に特別寄稿を依頼し、菊判であった雑誌『宗粹』よりも、さらに規模を拡大して、これを四六倍判とし、38年9月その創刊号を世に送ったのである⁶。

と述べられている部分からも読み取れる。望月が浄土宗高等学院教授となったのは明治32(1899)年、31歳の時。同校では浄土学のほか三論・華嚴・大乘起信論などの学科を担当し、一方で『宗粹雑誌』誌上に、浄土学のみならず仏教学のさまざまな領域に関する数々の論考を執筆するなど、教育・研究の両面にわたって精力的な活動を続けていた。

しかし望月は、この『宗粹』により宗務当局ならびに宗政を批判したとの理由をもって、明治38(1905)年4月に辞職に追い込まれることになる。

このことによって望月は、いくつかの方向転換を余儀なくされた。まず一つ目は、あの『宗粹雑誌』に関してである。宗門の時事を論じるのではなく宗教界全体を視野に入れるものを目指し、『宗粹雑誌』を廃刊するとともに、鷺尾順敬と日本宗教協会を設立。同年9月には『宗教界』創刊号を世に送り、以来、望月は同誌を中心に数々の論考を発表、大正3(1914)年には浄土学関係のものを集めて金尾文淵堂より大著『浄土教之研究』を刊行している。

金尾文淵堂というと、薄田泣菫の『白羊宮』をはじめとする文芸書の出版者として知られるが、仏教書も数多く手がけていた。望月の自叙伝によれば『法然上人全集』の編纂を持ちかけたのも金尾文淵堂の主人、金尾種次郎であったようで、自叙伝には先に掲げた文に続いて、

時に書肆文淵堂主金尾種次郎氏は、予が学校を引退し、少し余暇が生じたのをみて『法然上人全集』の編纂を依頼して来たのである。そもそも法然上人の遺文は、その当時、いまだ纏められておらないのみか、『選択集』『和漢両語燈録』『勅修御伝』の外は諸方に散在し、玉石混淆していて、その真偽すら判明しない状態にあり、しかもそれらの多くがほとんど知られておらなかったので、この編纂の完成には相当の苦心努力が払われたわけである⁷。

と記されている。『法然上人全集』は黒田真洞と望月信亨

の共纂によるもので、法然に関する文献や法語などを集め、釈義、法語、問答、制誡、消息、説話、雜纂、および附録にわけて収録したものである。明治39(1906)年7月の刊行で、以降たびたび増補改訂が重ねられている。各図書館の目録を見る限り、初版については宗粋社発行のものと金尾文淵堂発行のものがあるようだが、『恩師望月信亨先生』は「自叙伝」「編著目録」とともに金尾文淵堂の名を掲げている。

のちに望月は『仏教大年表』『大日本仏教全書』『望月仏教大辞典』などのレファレンスブックや叢書の編纂に挑んでいくが、望月の高等学院辞職を機に編纂が進められた『法然上人全集』は、その記念すべき第一歩としての意味をもっていたと考えられる⁸。

吉水智海の『支那仏教史』が、その金尾文淵堂から刊行されたのは、明治39(1906)年10月1日のことであった。同書もまた、望月と金尾文淵堂との間に著者・版元との関係が兆した時期の作品のひとつとして見ることもできるのではないだろうか。

むすびにかえて

かつて、本山や寺院によって行われていた僧侶養成教育は、明治・大正期を通じて各宗内に整備された学校制度の中で行われるようになり、その中にはしばしば、インドや中国、日本の仏教史が講じられるようになる。明治39(1906)年に金尾文淵堂から刊行された、吉水智海『支那仏教史』は、吉水自身が以前から宗派学校において講じてきた仏教史の講案をもとに、望月信亨の尽力により刊行されたものであるが、こうした著述が世に送り出された背景には、学校制度の受容を通じて再編が図られた、僧侶養成制度の変化があった。

その後刊行された仏教史の中にも、宗内の諸学校における教科書として、あるいは、その講案に基づいて再編された著述としての性格をもつものは多い。例えば第三仏教中学校(平安中学校)で教鞭を執った伊藤義賢が、明治43(1910)年に刊行した『印度支那仏教通史』には、その例言には、

三国仏教に関する歴史の著述は其数尠からずと雖、其多くは精密に過ぎざれば難解、未だ以て中等宗教学校の教科書に、將た又一般初学者に資すべき簡明の著あるを見ず、著者第三仏教中学に教鞭をとるや、切実に此欠陥を覚へぬ、仍て敢へて浅学を顧みず、茲に日頃の教案を綴りて、之に些少なる経験の斟酌し、以て遂に此小冊子を公にしたり

と記されており、自身の講案をもとに編まれた中等宗教

学校向けのテキストであったことがわかる。また、境野黄洋『印度支那仏教史要』（鴻盟社、1906年）も、その序言において「中等宗教学校の教科書に充てんことを目的とするもの」であると述べ、やや下って編纂された平安専修学院編『印度支那仏教史要』（興教書院、1926年）も例言に「本書は印度支那仏教史の概要を授けんがため、仏教専修学院、仏教学院の余乗教科書として、且又本派本願寺教師検定の受検用にも充つべく編述せり」と述べている。

本稿では言及できなかった、他の中国仏教通史も含めて評価し、中国仏教史研究の来し方を辿っていくためには、近代日本における各宗の僧侶養成の変遷や学校制度の変遷、カリキュラム、著者の事績なども視野に入れながら、考察を重ねていく必要があるだろう。今後の課題としたい。

1 なお、戦後に刊行された中国仏教史については、いずれも『支那仏教史学』の同人であった道端良秀『中国仏教史』と塚本善隆「支那仏教史」のものを含んでいるが、その他のものについては原則として除外した。関心のある向きは、

- ・大谷大学仏教学会編『仏教学への道しるべ』（文栄堂書店、1980年）
- ・平川彰編『仏教研究入門』（大蔵出版、1984年）
- ・菅沼晃博士古稀記念論文集刊行会編『インド哲学仏教学への誘い』（大東出版社、2005年）
- ・岡部和雄・田中良昭編『中国仏教研究入門』（大蔵出版、2006年）

などの中で主要なものが取り上げられている。また、拙稿「書評『興隆・発展する仏教』新アジア仏教史、中国Ⅱ・隋唐」（『仏教史学研究』54(2)、2012年3月）や「戦時体制下のアジア仏教史—金山正好著『東亜仏教史』をめぐって—」（『図書の譜—明治大学図書館紀要—』17、2013年3月）の中で、いくつかの通史的著述について言及しているので、あわせて参照していただければ幸いである。

- 2 吉水智海による中国仏教史の時代区分については、鎌田茂雄『中国仏教史』1（東京大学出版会、1982年）序章7節「中国仏教史の時代区分」pp.63-74を参照。
- 3 塚本善隆「批評・紹介 境野黄洋著『支那仏教精史』（『東洋史研究』1(3)、1936年2月）
- 4 このうち『支那仏教精史』については、1972年に国書刊行会から復刻版が刊行されている。さらに2003年には、うしお書店から『境野黄洋選集』全10巻の刊行がはじまり、中国篇として第1巻と第2巻に『支那仏教精史』が、第3巻に『支那仏教史講話』の下巻が収録された。本選集には各巻に詳細な解説が付けられ、中国仏教に関するものとしては、第1巻と第2巻には伊吹敦「境野黄洋と仏教史学の形成（上・下）」が、第3巻には佐藤厚「境野黄洋著『支那仏教史講話』」が掲載されており、境野の業績を知る上で大変有益である。

- 5 伊藤義賢の事績については、『山口県百科事典』（大和書房、1982年）p.58、『昭和山口県人物誌』（マツノ書店、1990年）p.65、『真宗人名辞典』（法蔵館、1999年）pp.22-23などのレファレンスブックの中で紹介されているほか、『偉人「村田清風」を生んだ三隅町の歴史と民俗』（三隅町、1973年）pp.694-696にも言及がある。また阿武至朗『忘れ得ぬ名師30話』（百華苑、1991年）p.106にはその肖像が掲載されている。
- 6 望月信亨先生三十三回忌追悼会世話人会編『恩師望月信亨先生』（山喜房仏書林、1980年）p.122
- 7 『恩師望月信亨先生』（注6前掲書）pp.122-123
- 8 なお、金尾文淵堂と望月信亨との関係については、石塚純一『金尾文淵堂をめぐる人びと』（新宿書房、2005年）第3章「『仏教大辞典』の蹉跌」にも詳しく紹介されている。

参考文献

- 常光浩然『明治の仏教者』上・下（春秋社、1968～1969年）。
- 大正大学五十年史編纂委員会編『大正大学五十年略史』（大正大学五十年史編纂委員会、1976年）。
- 江島尚俊「近代浄土宗における僧侶養成の変遷」（浄土宗総合研究所編『僧侶、いかにあるべきか』総研叢書9、浄土宗、2016年）。
- 浄土宗大辞典編纂実行委員会編『新纂浄土宗大辞典』（浄土宗、2016年）。
- 「WEB版新纂浄土宗大辞典」浄土宗、
<http://jodoshuzensho.jp/daijiten/>（参照2021.7.28）